
俺様と私の関係

羽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺様と私の関係

【Zコード】

Z9353U

【作者名】

羽月

【あらすじ】

人生最大の不幸が一度にやってきた。仕事も家も家族も恋人もなくなり、泊るところもなくなつた。公園で、これからのことを考えていたら、急に声をかけられ車に乗せられて着いたところは、昔何度も来ていた幼馴染の家。　　。その家に住むのは、俺様な幼馴染。一体、これから私はどうなるの…？

第1話（前書き）

この小説はあくまでもフィクションです。
ちょくちょくこんな事ありえないだろう！…といつことが書かれて
ると思いますが、そこは読者様の広い心でスルをお願いいたしま
す。

第1話

一体どうしてこんな事になつたのだね。」

車を降りた先にはお城と呼んでいいくらいの大きさの家

ここには昔、何度も遊びに来た。

それは昔の語句。力の内

「なんでも、体へん」

私は、見上げたまま目をつむりこれまでの事を思い出してみた。

* * * * *

「……………」れか「うん」・・・・

もうすぐ日も落ちる夕暮れの公園。隣には大きな荷物が2つ。

22才。社会人1年目。
小倉恋華。
おくられんか

「はあ・・・・・・」

ベンチに座り膝の上で頬杖をついている姿はどう見ても哀

愁が漂つてゐるだろう。

今、私は人生最大のピンチに陥っているのだから、それもしょうが

ない。

「・・・・ホームレスにだけは絶対なりたくない・・・・」

年頃の娘がなぜこんな事を呟かなければならぬのだろつか。
それもこれも、遡ること数日前。

それはそれは、人生の最悪な事がすべてその日にまとまってきたの
ではないかというくらい最悪だったのだ。

朝、家を出て会社に行つたまでは普通だつたのだ。

しかし、今年4月に入社したばかりの会社に行つてみると、私の席
には知らない女性が座つていた。

「あ、あの・・・。その席は私の席なんですけど・・・」

声をかけるとそこに座っていた女性は「こちらを振り返ると好奇心丸
出しで聞いてきたのだ。

「あなた、一体何したの？入社して4カ月でコレなんてありえない
わ」

”コレ”と言つて彼女が示した行動は親指を立て首の前を綺麗にそ
の指が通つて行つた。

「・・・・え？・・・・」

彼女のとつた行動に私は目が点になつた。

「え？まさか知らなかつたの？・・・・あー・・・・とにかく部長
の所に行つた方がいいわよ？」

私の反応を見た彼女はぱつが悪そつこそつぱつと机に向かって仕事を始めた。

訳が分からぬ私はとにかく彼女に言われたとおりに部長のもとへ向かつた。

「営業2課の小倉です」

部長室へ向かい扉をノックし、名前を名乗ると中から部長の声が聞こえた。

「・・・入れ」

その部屋に入ると部長は険しい顔をしてこちらを見た。

「失礼します」

「・・・そこに座りなさい」

応接セツトのあるソファーを指されそれに腰を下ろした。

「・・・あ、あの。私の席に違つ方が座つていてのですが、一体どうしてうどんとでしょう? クビつて・・・」

とにかく、彼女に言われたことが頭から離れなかつた。

「・・・君は身に覚えはないのかね?」

鋭い目つきで私は怯みながらも、返事をした。

「あ、ありません」

「…………倉井 慶介という人を知っているだろ？」

倉井 慶介…………。

もちろん知っていた。

大学時代から付き合っている上位の私の恋人の名前だった。しかし、なぜ部長がそれを知っているのか……。

「…………はい。知っています」

「…………はあ…………。堂々と言つとは大したものだな」

呆れたように、しかしその声には怒りも含まれていた。

「…………彼がどうかしたのでしょうか？」

彼はこの会社の取引会社に勤めている。

もしかして、そのことで何か問題でもあったのだろうか？

「つは！彼ときたか！君のした事で我が社大変なことになつていたのだぞ？わかつていてるのか！！」

部長はどういう怒りを私にぶつけて来た。

「な、何のことでしょう？」

泣きそうになるのを堪えながら、一体何の事かをとにかく聞きたかった。

「まだとほけるのか……ですが、不倫をするような奴はしたたかな……！」

部長の言葉に私は目を丸くしてしまった。

「ふ、不倫！？」

「ああー…やうだーーまつたく、よりもよつて倉井商事の娘婿に手を出すとはーー！」

娘婿・・・・・。

「あちらから身内に手を出すよつな社員を雇つてゐる会社とは取引出来ないと言われたんだーー君のせいだわが社は信頼をなくすところだつた！！」

まさか・・・・・。

そんな・・・・・。

部長の言葉はすでに耳には入つて來ていなかつた。

「そんな社員はよつちには必要ないからね。今日限り辞めてもいい。わかつたら、わつやと荷物をまとめて帰つてくれ！」

部長は言つだけ言つとさつさと部屋を出て行つてしまつた。
残された私も、部長室にいるわけにもいかず、茫然としたままその部屋を後にし、そのまま営業課に戻つた。

営業課に戻ると、先程の女性がこちらに気付かれて近づいてきた。

「・・・あなたの荷物邪魔だったから、あつちに置いておいたわ。

やつをと付けてお家に帰りなさい。」いつも急な異動で迷惑して
るんだから」

指さした先はすでに課の外に段ボールに荷物が詰められて出されて
いた。

一体、何が起こったのかわからないまま、私は言われた通りそれを
持ち、今までお世話をなった課の皆に向かって一礼をしてその場を
後にした。

卷之二

会社の外に出ると持っていた荷物が手から滑り落ち、その場にしゃがみこんでしまった。

۱ : : : : : : : : : : : : :

私は携帯を取り出し、あわてて慶介に電話をした。
何回かコール音が聞こえ、途切れたかと思うと、いつも聞きなれて
いた声が聞こえてきた。

— १०७ —

慶介

「置いたんだ？」「

彼の声は変わらない。

「そういう事だ。じつちもばれてしまつて今大変なんだ。もう2度と電話もメールもしないでくれ」

そういうとすぐに電話は切れた。

その声に、その言葉にまたたく悪びれた様子はなかつた。慶介とは大学の友達とコンパに行つたときに出会つて、付き合い始めた。

奥さんのいたよつなそぶりは何一つなかつた。・・・・と感へ。

2年・・・。

付き合つた期間は2年だ。
その間ずっと騙されていたのだろうか・・・・。

驚きと落胆と自分への情けなさに、涙すらながれなかつた。

「・・・・・はつ・・・・・。男と会社を同時に失つ何て・・・・・。なんかのドラマ見たい・・・・・」

自嘲気味につぶやいた時、携帯が鳴つた。

もしかして、慶介がかけなおしてきたのかもしれないと慌てて携帯を見てみるが、そこに表示されていた番号はまったく知らない番号だつた。

「・・・・・はい・・・・・」

「小倉さんの携帯でしょつかー!?」

電話に出た相手の声に聞き覚えはなく、とても焦つているようだつた。

「・・・・・はー、そうですが・・・・・」

「小倉恋華さんですね!! 落ち着いて聞いてください。今、あなたのお家から爆発のような火事がおきて、両親がおけがされました。今、病院に向かっていますー!!」

電話から聞こえる声はあわただしくそれを伝えた。

「・・・・・火事・・・・・?・・・・!両親は!両親は無事なんですか

！？」「

「落ち着いて下さい。今、病院に向かってますが、お一人とも怪我がかなりひどいです。このままでは、命も危ない。今すぐ × 病院の方へいらしてください…！」

「わかりました…！すぐに向かいります…！」

そう言つと、携帯を切り、その場にあつた荷物を抱えタクシーに飛び乗つた。

お父さん…・・・お母さん…・・・どうか無事でいて…・・・。

今まであつたことなどはすっかり忘れてタクシーの中で祈つた。

「すみません…！先程運ばれた小倉の家族です…！」

病院に着くなり受付に怒鳴り込んだ。

「…・・・小倉さん…？今緊急治療室へ運ばれました。そちらへ行ってください…」

受付の人に言われるままいそいで緊急治療室へ向かった。
なんだか、受付の人も切羽詰つた感じだったのは気のせいだろうか？

「お父さん…お母さん…！」

緊急治療室の前に着くと看護士の人人がそこで待つていた。

案内されて通された緊急治療室ではもうすでに片付けを行っていた。対面した時にはすでに父も母も息をしていなかつた。

「お母さん……お父さん……」

泣き叫んでも父も母も戻つてくるはずはなく。家も焼けてしまい両親も失つてしまつた。

その後、どうしたのかは全く覚えていない。気付いた時には、父と母は私の手元から離れて今はおじいちゃんとおばあちゃんが眠るお墓で一緒に眠りについた。

「恋華ちゃん……。お父さんもお母さんも亡くしておじさんもおばさんも言いつらうんだけどね。恋華ちゃんはもう成人した大人だ。これから、一人でもやつていけるよね？」

お墓の前で話す伯父さんはお母さんのお兄さんだ。

「叔母さんたち、仕事で海外へ行く事になつたの。恋華ちゃんもう大人だし一人暮らしして自分の事をやって頂戴ね」

にっこりと笑う叔母さんはなんだか海外へ行くことが楽しみの様で悲しいそぶりなど一切なかつた。

「……大丈夫です。……私一人でもなんとかなりますから……」

・

病院に着いてからお葬式まで全て伯父さんにまかせっきりだった。これ以上迷惑をかけるわけにもいかず、一人で暮らす事を決めた。

それから、焼けてしまつた家に帰りまだ何とか無事だつた荷物をまとめるととりあえず伯父さんが用意してくれたホテルへと足を運んだ。

伯父さんたちは既に明日から海外へ出発するので、私が滞在するホテル代1週間分の支払いを先に済ませ早々に自分達の家へ帰つて行つた。

「これから、家も探さなくちゃ……」

ホテルの与えられた部屋へ足を踏み入れ体をベットに投げだすと、また止まつていた涙があふれ出した。

「・・・お父さん・・・お母さん・・・」

いなくなつた事がどんどんリアルになつていいく。

それでも、どこかでまだ2人が生きているんじゃないかとふとした瞬間に思つてしまつ。

「そんなわけないのにね・・・・・」

枕に顔を押し付け声を押し殺して泣いた。

その夜はそのまま泣き疲れて眠つてしまつていた。

次の朝目が覚めると、目がひりひりと痛く瞼が腫れていた。

とりあえず顔を洗おうと洗面所に向かつと鏡に映つていた自分の顔に思わず苦笑してしまつた。

「ふ・・・。汚い顔・・・」

自分をしかつと見つめると、蛇口を思い切りひねり頭から水をかぶつた。

しつかりと頭を冷やすと水を止めタオルで顔を拭いた。

「しつかりしなきやーーー!」これからは、私ひとりなんだ。いつまでもめそめそしてたらお父さんやお母さんで叱られちゃうわ!」

両頬を思い切りたたくと化粧を始めた。

「まずは住む家を見つけなくちゃね!」

少しでも気を緩めてしまつと溢れだしそうな涙をこらえしつかりと化粧が崩れないようにメイクを施した。

「…………そですか……」

これで5件目だ。

気合いを入れて家探しを初めて1週間。
ホテルもすでにチェックアウトをしてきた。

「…………どうしよう。こんなに決まらないとは思わなかつた……」

両親が他界し、叔父夫婦も海外へ旅立つてしまつた。
家を借りるのにも保証人がいなければなかなか貸してもらえなかつた。

その上、今は仕事をクビになつてプー太郎だ。

「…………もしかして私、今日からホームレス…………？」

不動産を歩き回りつかれて行き着いた公園で一休みするも、これら先の事を思うと不安で仕方なかつた。

「友達の所に行こうかな…………」

しかし、友達のところに転がりこんでも、泊まれるのはせいぜい1・2泊だ。

それに友達はみんな仕事でいっぱいいっぱいだ。

「…………これからどうしよう…………」

頭を抱えて悩んでいると、ふと目の前が暗くなつた。

何かと思い顔をあげてみるとそこにはサングラスをした黒ずくめの男が立っていた。

「え・・・? な、なに・・・」

「小倉 恋華さんですね?」

男は口を開いたかと思うと私の名前を口にした。

「は? え・・・はい、そうですけど・・・」

目の前に立つ男に見覚えはなかった。
いや、見覚えがあるとかないとかっていう前にものすごく怪しい人物だ。

これは、逃げなければと両脇にあつた荷物に手をかけた。

「篠井 尚人様より貴方をお迎えに行くよう申し付かりました大西
と申します」

足を踏み出し逃げようと思つたところで聞き覚えのある名前が出て
きた。

「し、篠井・・・尚人・・・?」

「はい」

聞きたくもない名前だった。

「・・・・篠井尚人がなんですか?」

思わず声が鋭くなってしまひ。

「貴方様を篠井家にお連れするよりひととの事です」

は？お連れ・・・？

「冗談じやない！？」

「お断りします！」

「やう言つ訳には参りません。もとより貴方の意志に関係なくお連れするように言われておりますので・・・失礼します」

そういうと大西と名乗った男は私を抱きあげた。

「いやよーー下ろしてよーー！」

手足をばたつかせてみるが大西はびくともしない。

「おい、小倉様のお荷物をお持ちしろー！」

大西が声をかけたかと思うともう一人の黒ずくめの男が出てきて私の荷物を勝手に持つて行ってしまった。

男たちが向かう先を見るとそこには真っ黒な高級車が止まっていた。

「おりしてーー下ろしてってばーー！」

大西の背中をぼこぼこと殴つてみるが全く効いていないのか涼しい顔をして車に近づいていく。

「ドアを開ける」

荷物を持っていた黒ずくめがドアを開けるとそつと下ろされた車に乗せられた。

「小倉様、申し訳ございませんが少しお静かにお願い致します」

座席に座られ耳元でせせやかれるとカチャッとシートベルトを締められ、車は動き出した。

車の中でも散々暴れてやつた。

「到着いたしました」

なのに大西は全く乱れた様子もなく車の扉をあけた。すると着いた先はやはりというかなんというか・・・。

「・・・一体、なんで・・・」

目を開けると何度も一度と来ないと誓った家が建っていた。

「小倉様、どうぞ中にお入りください」

ここまで連れてこられてしまつてはもう抵抗する気力もなかつた。大西の後に続いてその家へと足を踏み入れると、久しぶりに見るこの家の執事が現れた。

「恋華様。ご無沙汰いたしております。尚人様がお待ちです。どうぞ書斎の方へおいで下さい」

執事の鏡ともいえるお辞儀に私もその人の前で止まつた。

「・・・敏爺・・・」

その執事の名を呼ぶとこつこつと笑い返してくれたが敏爺が言葉を発する事はなかつた。

大西が先を促すと私は敏爺の前を通り過ぎ、長い廊下を歩き続けた。

見慣れた廊下・・・。

見慣れた大きな扉の前に着くと大西が扉を叩いた。

「コンコン

「小倉様をお連れしました」

すると中から聞きたくもない声が聞こえた。

「入れ」

「失礼致します」

大西が扉を開けると大西は中へ入る様に促し、私だけを中に入れそのままドアを閉めてしまった。

一人残されてしまつた事に驚き、扉を開けようとしたらもうびくともしなかつた。

「・・・・・恋華

私の名前を呼ばると、ビクッと肩がすくみそのままの体勢で固まつてしまつた。

振り向かない私が癪に障つたのか後ろにいた男が近づいてくる気配がした。

「恋華」

次に名前を呼ばれた時にはすぐ後ろにいる事がわかつた。

「・・・・久しぶりだな。お前が逃げて以来か?」

いきなり肩に手が乗つてきた。

突然の事に体が更に強張った。

「…………いい加減こっちを向け」

肩に置かれていた手に力が入り、無理やり振り向かされた。そこには、見たくもない顔が目の前でにやりと笑っていた。

「イイザマだな」

歪んだ笑顔で私を見下ろす。

「俺から逃げてどうだつた？ 楽しかつたか？」

鋭い目で私を見てくる尚人に私は下唇を噛みしめながらうつむいた。すると、尚人はそれを許さないとでも言いつぶつに顎を掴むと顔を上げさせた。

「…………人が話しているときは人の目を見るものだらう？ お前が良く言つてたよなあ？」

顎を掴まれている腕を振り払おうとするがびくともしない。私は尚人を睨みつけると初めて言葉を発した。

「…………離して」

「はつ！ 久しぶりにあつた婚約者に言つ言葉がそれとは驚きだな」

そういうと掴まれていた手が離れた。

「婚約者なんかじゃないわ！」

思わず叫んでいた。

「……お前が俺にお願いしたんだろ？』『なおとくんのお嫁さんにしてね』ってな」

いやらしい笑顔を顔に張り付けたまま尚人は全く私の前から動く気配はなかつた。

「……一体いつの話をしてるの？そんのは子供の戯言だわ」

私が言った言葉に尚人の顔からいやらしい笑顔が消えた。
だけど、私は構わずに続けた。

「大体あなたにはたくさんの女性がいるじゃない。わざわざ私に固執しなくともいい筈だわ。いい加減私を開放して！」

目の前の尚人を見るだけで嫌な思い出が次々と蘇つてくる。
今すぐにでもこの場から立ち去りたいのに、開かない扉と目の前に立っている尚人によつてそれすら叶わなかつた。

「……くつ」

目の前から笑いがこぼれる。

「解放？解放してやつたじゃないか。逃げるお前の後を俺は追わな

かつた」

確かに、あの時尚人は私を追いかけてくる事はなかつた。
ならなぜ今になつて私はここに来ているのだ？

「……勘違いするな。お前の母親と俺の母親が約束をしていた
んだ」

「……約束？……」

私がつぶやくと尚人は私の前から離れ自分の机の上にあつた紙を取り上げ、こちらに投げた。

「それが証拠だ。お前にもし何かあつた時は家で預かり育てるとな

尚人の言葉に、私はその投げ捨てられた紙を拾い上げ口を通した。

「……もし自分たちに何があつたらお前を一人には出来ない。お前の母親が心配したんだろう。それを聞いた俺の母親がそれならば家で面倒を見ると言つたそうだ。そして、わざわざそんなものまで作りやがつた」

手元にある紙はただの紙ではなく尚人の母親との約束事が書かれた遺言状だった。

「まさか……。そんな……」

こんな話は聞いたことがなかつた。

こんな約束をしていたなんて……。

よく見ると日付は私がまだ幼かつた頃だ。

「……それは祐子さんの遺言だ。俺の母親がそれを弁護士を通して承諾した。そういうわけでお前は今日からここに住むんだ」

尚人は信じられない事を言つた。

「……この家に住む……？」

尚人の住むこの家に？

「……嫌よ！私はもう成人してるわ！一人でだつて生活していくる！」

「……そんな事は俺の知つた事じゃない。母さんがそれを承諾した。俺がとやかく言う問題じゃない」

尚人は自分の机に戻ると机の上に置いてあつた電話に手をかけ誰かと話しているようだつた。

「そういう訳だ。ともかくお前は今日からこの家に住む事になる。あとは大西にでもきけ」

そういうと、先程まではびくともしなかつた扉がひらき大西が現れた。

「大西、そいつを部屋へ連れて行け。後の事は頼む」

大西は尚人に返事をすると呆然とする私を立たせ部屋の外へと連れ出そうとした。

「ああー…やつだー…恋華。勘違いしないよつに言つておぐが、
だなんて思うなよ？あんなのはただの戯言だったろ？」

くわくわくと笑うと犬を追いやるかのように手を振った。

「 じじが今日から小倉様のお部屋となります」

大西に連れられて着いた部屋は、ホテルのスイートルームかと思つ
ような豪華な部屋だつた。

呆然としたまま傍にあつた椅子に腰を下ろすと大西がサングラスを
とつて私の前に立つた。

なんだ・・・。

この人つてイケ面だつたんだ・・・。

思考停止気味の私の考えた事はそんなくだらない事だつた。

「 小倉様、じちらに住むにあたつての注意点を申し上げます」

私は返事もせずにぼけつとしていた。

「 まず、じちらの家に男性を連れ込む事をしないで下さい」

反応しない私の事を無視して大西は続ける。

「 それから、尚人様のお部屋を訪ねることも控えて下さい。あなた
はこの家に居候という事になります。しっかりとお立場を考えて行
動なさつてください」

大西は言い終わるとわざと部屋を出て行つてしまつた。
しばらく、何が何だかわからなかつたが一人になり冷静になると
んどん頭に血が上るのがわかつた。

「 ・・・どういう事よ・・・何が居候よ・・・貴方達が勝手にここに連

れてきたんじゃないやない！！私は望んでなんかいないわ！！男連れ込むのだつて男がいないのよ！！大体、尚人の部屋になんか行くわけないでしょ！！」

あまりの勝手な言い草に腹が立ちすぐそばにあつたクッショングラフを扉めがけて思い切り投げつけてやつた。

גַּם־בְּעֵד־מִתְּנָאָה וְלֹא־בְּעֵד־מִתְּנָאָה

なんで、こんな約束したのよ。

なんでこんなどこのこはいたけれど、なんなんのよ

久しぶりに見た母の文字に、母の思いに1週間我慢していた涙が溢れてきた。

* * * * *

ふと気が付くと窓から差し込む光は赤色に染まっていた。

「・・・寝ちゃつてたのね・・・」

久しぶりに泣いてしまった。

「・・・ホント、ホテルにいるみたいだわ・・・」

ここが本当にホテルだつたら良かつたのに。

そしたら、こんな深い深いため息だつて出でこなかつただろ。

「でも、今の私はお金も仕事も保証人もいない・・・。どうしたらいいの・・・」

誰も答えてくれる事がないと解つても思わず声に出て誰かに答えを教えて欲しかった。

コンコン

扉が叩かれる音が聞こえ、涙ぐんでいた顔をタオルで拭うと返事をして扉を開けた。

「はい？」

そこに立っていたのは敏爺だった。

「恋華様。お食事の準備が出来ました。どうぞ食堂の方へお越しください」

につこりと笑う笑顔に思わず昔の面影を見つけたみたいで声をかけた。

「敏爺！！ねえ、私どうすればいいのーー！」

昔は困つていたらさりげなく助けてくれる優しい敏爺が大好きだつた。

敏爺はつこりと笑つたままこりを向くとゆっくりと口を開いた。

「・・・恋華様の思うとおりになれば良いのです」

一言やうごうとまた敏爺は何も言わずに立つていつまほ笑んでいた。

敏爺に連れられ重い脚を何とか動かし食堂へと向かった。
扉を開け入った先には広々とした部屋の中にこれまた、どこの王族ですか?と、問いたくなるような長いテーブルが置かれていた。

「どうぞ、恋華様」

そう言って椅子を引いてくれた敏爺にお礼を言つてそのままの椅子に座つた。
座つたとたん、タイミングを見計らつたかのように食事が運ばれてくる。

まずは前菜。テーブルの上に写真から飛び出たようにせりつけられたりと並べられたカトラリーに私は迷うことなく手を伸ばす。
物心ついた頃にはテーブルマナーは完璧に覚えていた。
それもまた、忌々しい思い出にすぎないが・・・。

「・・・・おいしい・・・・」

空腹のお腹には何を食べてもおいしく感じるのだろうが、ここで
出される食事は空腹でなくとも美味しいと思わず声が出てしまつ。
だけど、思ったより私はお腹がすいていたみたいで、しっかりと味
わう前に全部平らげてしまった。

お腹もいっぱいになり食後に出でたコーヒーに口をつけていると、
扉が開き見たくもない顔が現れた。

「・・・・なんだかんだ言いながらじっかり食べているじゃないか」

鼻で笑う尚人の言葉にぎくしゃくと睨む。

「はつ・よくそんな顔が出来たもんだ。居候のくせにすりすりい
な」

そういうと尚人は向かい側の席に腰を下ろした。

・・・向かい側と言つても随分と距離はあるが・・・。

「・・・・私、家が決まり次第ここを出て行きます。それまでは、貴方も嫌でしょうがここに置いて下さい。お願いします」

尚人と会う事はないだらうと思つていたが、もし会う事が出来たならば言わなければいけないと思つていた。

今はどうしようもないから、嫌でもここに置いてもらわなければならぬ。

いくら、母同士が勝手に決めた事だとは言え、今の私には寝るところがあるだけでもありがたかった。

だから、悔しいが今はこいつに頭を下げる事に決めたのだ。

「ふん・・・・・。俺は関係ないといつたはずだ。お前をここに連れてきたのは母親だからな」

尚人はそういうと運ばれてきた料理を口にして食事を始めた。

私も、これ以上話す事はなかつたから、席を立ち頭を下げる部屋へと戻つた。

「・・・・まずは仕事を決めなきや・・・・」

部屋に戻つた私は備え付けの机の前に座りノートを広げた。

? 仕事を決める!!

? 部屋を決めるーー

? 一度と屋敷に近づかないーー

その3つを一番最初のページに大きく書きそれを眺めた。

小さいころから、目標をノートに書いてはそれを達成させて来た。幼いころ、なんでも中途半端に投げ出していた私に母が1冊のノートを渡してくれて言った。

『恋華?なんでも途中で投げ出さない様に目標を決めましょう?そして、目標を達成させる為に頑張った事をこのノートに書きなさい。そして、投げ出しそうになつたらそれを読み返しなさい。そうしたら、今まで頑張ってきた事を投げ出すなんてもつたいない事、できないでしょ?』

その頃は母の言つた意味がいまいちわからず、ただただ、可愛いノートを貰えた事が嬉しかった。

それでも、母の言つとおり目標を書き、そのノートに頑張った事、辛かった事を書き始め辞めくなつたらそれを読み返した。

その時初めて母の言つた意味がわかつた。

目標をやり遂げるだけじゃなく、それまでの過程も大事にしなきやいけないってこと。

人間は壁にぶち当たつて、それを乗り越えて色々な事を学んでいくんだつてこと。

「・・・・だから、これはお母さんが私に『えた試練なんだよね?」

ぱつりとやう齒いてみても返事はもうあるわけがない。

「私、ちゃんと乗り越えてみせるよー。」

そういうとノートをパタンと閉じて、着替えを済ませると仕事を探す為屋敷を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9353u/>

俺様と私の関係

2011年10月7日12時36分発行